

韓国における剣道競技の映像判定システムについて

コーチング科学研究領域

5O22A023-1 金 明燮

研究指導教員: 射手矢 岬 教授

【緒言】

スポーツ界には、映像判定システム(以下;映像判定)が存在するが、剣道では、唯一韓国が誤審の減少と公平性の確保及び審判の資質向上を目的として使用している。映像判定が導入されたことによって、常に問題視されている「誤審」を覆す事が可能になり、客観性を担保できる事により剣道競技が活発化している事から、大韓剣道連盟は、主導的な役割を取り、早急に世界剣道大会にも映像判定が導入されることを望んでいる(大韓剣道連盟HP)。

しかし、韓国剣道の映像判定導入の実態はあまり知られていない。剣道における映像判定についての質的調査を目的とした研究(加藤 2012)(Hu et al., 2022)は散見されるものの、実際に導入を果たしている試合の分析までは至っていないのが現状である。

そこで本研究は、韓国と日本の映像判定に対するアンケート調査から両国の認識の違いを明らかにし、韓国の試合分析により映像判定の実態を明らかにすることを目的とした。これらの知見は審判の質の向上にも役立つ貴重な資料になると思われる。

【方法】

1. 韓国剣道実践者及び審判員への映像判定に関するアンケート調査

韓国の大学剣道選手(1年生~4年生の男女98名、未経験も含む)と、審判員(5段~7段の52名)の150名とし、Googleフォームを使用したインターネット調査を実施した。質問内容は、「映像判定においてのメリット・デメリット」「世界剣道大会への導入」に関する項目であった。

2. 映像判定における他国の現状調査

日本の大学剣道選手(1年生~4年生の男女100名)と、審判員(4段~8段の51名)の151名とし、Googleフォームを使用したインターネット調査を実施した。質問内容は、「剣道における映像判定の認知度」「韓国剣道についての認知度」「世界剣道大会への導入」「日本剣道への導入」に関する項目であった。

3. 映像判定が実施された試合の分析

映像判定が利用された2023年全国実業剣道大会の112試合を分析対象とし、試合データは韓国実業剣道連盟公式サイトで公開されている試合映像を用いた。

分析項目は、大きく4つに分けて実施した。

1) 総試合数、映像判定が要請された回数、要請率、その内の誤審の回数、最終的に判定が覆った比率をまとめた。

2) 打突部位(面, 小手, 胴, 突き)の「有効打突件数」, 「取り消し件数」をカウントした。

3) 映像判定が要請された試合を各打突部位のケース毎に「審判の判定」「映像判定理由」「映像判定後の結果」を3日目第1競技場・第2競技場, 4日目第1競技場・第2競技場に分けて記し、審判が誤審と疑われるケース毎に、疑義を招いた要素を記載した。

4) 対象試合で発現された技分類と技名称, 映像判定を用いたことによって有効になった回数, 無効になった回数を求めた。技の分類及び名称を剣道指導要領の技の項目に則って「しかけ技」(一本打ちの技・連続技・払い技・捲き技・出ばな技・引き技・かつぎ技・片手技・上段技)と「応じ技」(抜き技・すり上げ技・返し技・打ち落とし技)に分類し、対象試合で発現した技だけを載せる事にした。

【結果及び考察】

アンケート調査では、映像判定導入に関して学生は、「メリット」が74.5%、「デメリット」が1%、「わからない」が24.5%であった。

審判員においては、「メリット」が44.2%、「デメリット」が9.6%、「わからない」が46.2%であった。

世界剣道大会への導入において韓国の学生は、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が90.8%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が5.1%、「わからない」が4.1%であり、日本の学生は、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が28%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が56%、「わからない」が16%であった。

韓国の審判員においては、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が82.7%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が7.7%、「わからない」が9.6%であり、日本の審判員では、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が15.7%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が72.6%、「わからない」が11.7%であった。

映像判定における認知に関して日本の学生は、「はい」が38%、「いいえ」が62%であり、審判員においては、「はい」が39.2%、「いいえ」が60.8%であった。

韓国剣道への認知に関して日本の学生は、「はい」が34%、「いいえ」が66%であり、審判員においては、「はい」が23.5%、「いいえ」が76.5%であった。

日本剣道への導入において日本の学生は、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が20%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が58%、「わからない」が22%であり、審判員では、肯定派(「強く思う」「そう思う」)の回答が15.7%、否定派(「思わない」「あまり思わない」)が72.5%、「わからない」が11.8%であった。

韓国剣道の認識については武道よりもスポーツであり、勝敗を決する為の格闘技と捉える事ができ、映像判定を導入することで、剣道がより注目される競技になるための近道だとしている。

日本剣道は、「武道の本質」を重要視している傾向にある。スポーツのような1点、1ポイントではなく、「一本」としての概念(武道としての考え、要素)が含まれている。そのため、映像判定否定及び認知度も低いことが考えられる。

試合分析では、映像判定が使われたのは33回(29.5%)であり、映像判定が用いられた試合の内、15回の誤審があり、最終的に45.4%の判定が覆った。

有効打突数は18本、有効取り消し数は15本で、最も面が12(80%)本取り消しされた。

疑義の要素として「音」「勢い」「機会」(打突の好機)「体勢」「審判員の立ち位置」が挙げられた。

しかけ技、返し技共に発現が見られ、最も多く発現した技は、しかけ技では「一本打ちの技」でありその次が「出ばな技」であった。応じ技では、「返し技」「抜き技」が見られた。

大韓剣道連盟が出している判定事例と比較すると、最終的な判定は約50%の割合で覆っている事が窺える。このような判定が難しい技や肉眼で追えない素早い技を明確に判定し、勝敗に導く点においては、画期的な判定システムであり、これによって審判員のミス(誤審)を改めて意識し、審判講習会等に活かせる材料となる事が示唆された。

【結論】

アンケート調査では、映像判定について韓国は肯定的、日本は否定的に捉えており、両国の映像判定への考え方の違いは、剣道の理念の違い、文化の違いが挙げられた。

映像判定が用いられた韓国の試合分析では、映像判定の要請率は約30%で、その内45%(全試合の13%)の判定が覆った。また、誤審には打突部位に当たっていないものもあることから、少なくとも竹刀が打突部位に当たったか否かを判断するためには映像判定が有用であることが示唆された。